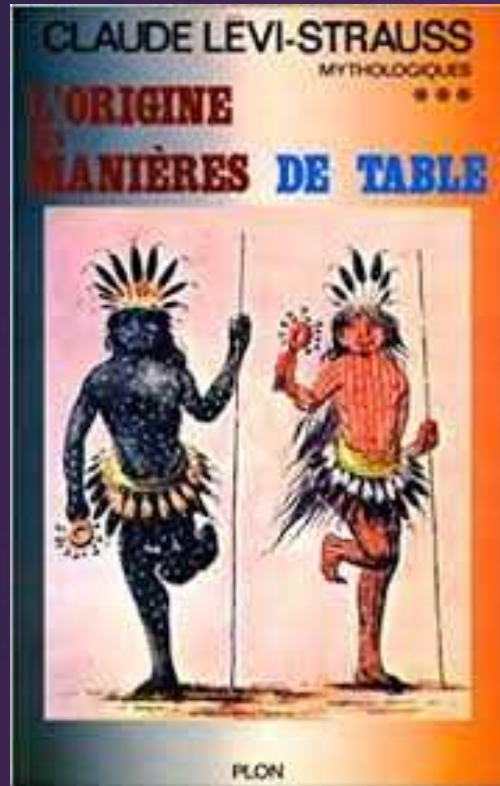


レヴィストロース
神話学第3巻
食事作法の起源 1

部族民通信 2024年2月15日

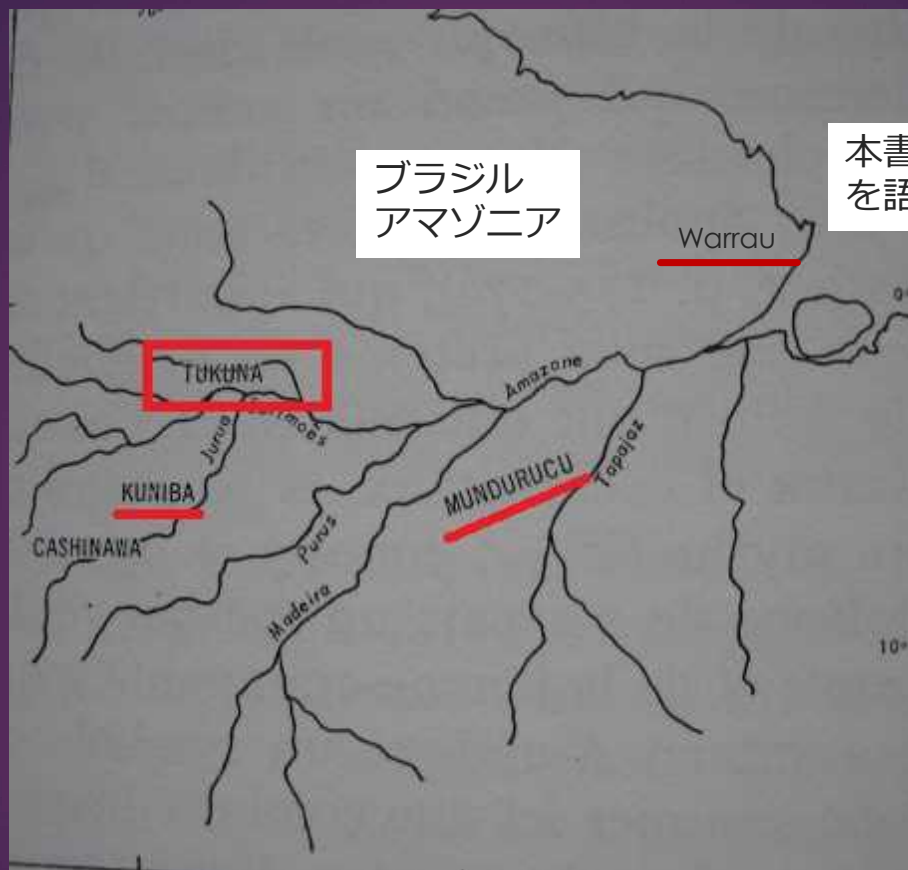
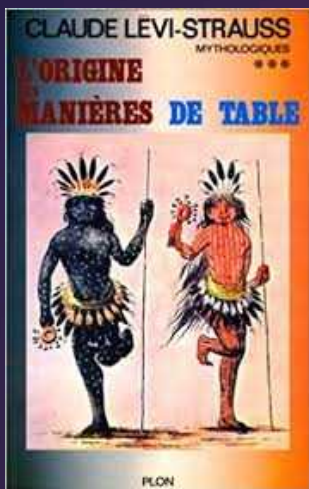


L'Origine des Manières de Table
食事作法の起源 1968年7月出版 Plon社

主な内容

- 1 食材（取得、摂取）における文化介入
（モンマネキ神話）
- 2 文化継続のために周期性の確立
（転がる首神話群）
- 3 近すぎる同盟、遠すぎる同盟
（麗しのアサワコ）
- 4 食事で音を立てる、立てない
（カエルと娘の食い競争、北米Arapaho族）
- 5 数え方の起源
- 6 新大陸神話の北上説

（今回の複数回動画では赤字題を採り上げる）



ブラジル
アマゾン

本書掲載の神話
を語り継いだ部族

ちびっこ民族学者
に観察される
レヴィストロース



« Ce mythe traitait d'une grenouille ravisseuse d'enfants. Qu'un festin de miel mène à sa perte. Sous une forme très affaiblie, et de manière épisodique, on trouve ces motifs associés dans un Tukuna» この神話（前巻蜜から灰へ・Haburiの冒険）は少年をかどわかすカエルの話だが、蜜の饗宴（ふんだん）が喪失に繋がる様を語っている。本巻は幾分か弱くなるも挿話的に同じ主題を伝えている(本書163頁)。

もう一文

« En vérité depuis le début de ce livre, nous n'avons discuté qu'un seul mythe. Tous ceux que nous avons successivement introduits l'ont été dans l'intention avouée de mieux comprendre celui dont nous étions partis : le mythe tukuna M354, qui raconte les mésaventures conjugales du chasseur Monmaneki » (同)

実際のところ、本書では始めからある**一つの神話のみを語っていた**。次々と続いて開示された神話とは、それを始めとして出発した神話をより正しく理解するためで、その意図の元に引用された。出発の神話とはTukuna族の神話

「狩人モンマネキと嫁問い譚M354」

M354 Tukuna族 Mésaventures de Monmanekiモンマネキの災難

奇怪な婚姻5例が語られる；



第一話« Un jour, une gracieuse jeune femme parut à cet endroit. Monmaneki s'étonna qu'elle fut enceinte : Tu es en cause, car tu pointais ton pénis vers moi » (本書17頁) 木立ちに立ちすくむは妙齡婦人、際だつその麗しさも水にしたたるかの構えでモンマネキに向かう。恨みがましく「身ごもるこの子の父はお前だ。男根を妾（わらわ）に向けたではないか」告げた。

仰天するモンマネキ、責任に迫られ娘を配偶に迎えた。「道ばたで拾った嫁ゴは何とも綺麗なことよ」祖母は喜んだ。

狩りに向かうも夫婦は一緒。仲むつまじく過ごした。ある日、嫁が用意している調理の壺を姑が何気なく覗くと、ゴミ虫やらムカデがうごめいていた。「à la vue des insectes, la vieille s'écria : Pourquoi mon fils se salit-il la bouche avec cette ordure » 虫を見た途端「こんな汚い物を息子に食わせていたとは」ヒトの食物に整えるため辛子をたっぷりか混ぜた。

その夕 « la femme fit chauffer sa petite marmite personnelle et commença à manger, les piments lui brulèrent la bouche. Elle s'enfuit, et sauta dans l'eau sous la forme de grenouille » (同) いつもの通りに鍋を火にかけ料理して、その食物を口にした嫁の口が辛子で焼けて、食卓から逃げ出し沼に飛び込みカエルに戻ってしまった。

祖母と息子の一家にカエルが嫁いで、婚姻同盟が結成された。曲がりなりにも（人の）社会が始まった。しかし食事の中身(コオロギなど昆虫食)が文化規範（食事作法）から外れていた。

姑祖母のメガネに合わなかった。文化創成にて妥協を許さない老婆ちよっかいで離縁となった。

人とカエルの一粒種は嫁が取り戻した。モンマネキは世代再生産に失敗した。

第2話 Arapaço鳥（蜜吸鳥、挿絵本書から）が樹上に休むに目をとめ「ひょうたんを満たすだけの樹液をおくれ」と呼びかけた。その夕の帰り道、道ばたにたたずむ姿がとっても魅惑的な娘がモンマネキを見つめる、彼が脚を止めた訳は娘の風情とその肩の瓢、肩の軋みの塩梅で椰子酒がたっぷり充満すると分かる。彼はその娘と婚姻を結ぶが、姑の介在でまたも破局する。顔姿は見目麗しいのだが両の脚が醜かった。

« Elle était ravissante, mais avait de vilains pieds. La grand-mère du héros s'écria qu'il aurait pu mieux choisir ! Vexée, la femme disparut » 嫁は魅惑的だったが脚が醜かった。それを見るやいなや、孫はもっと良い嫁を選べたはずだ、姑が叫んだ。嫁は当惑のあまり逃げてしまった

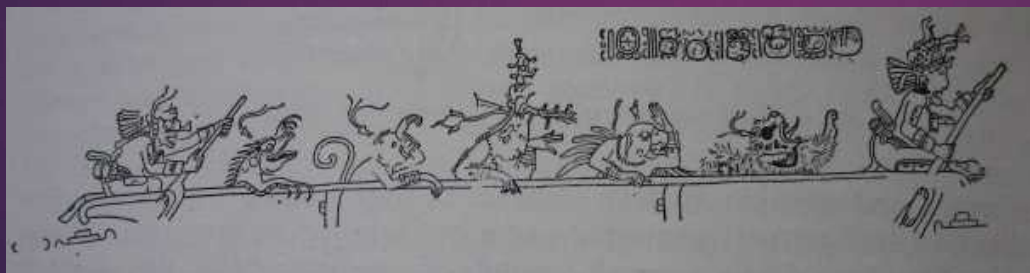
離縁の直因は醜観とされるが、背景には樹液をたやすく手に入れる境遇となった息子モンマネキへの戒めとも読める。貴重な食材は人が額に汗、苦勞して得る、これが文化支配の食事作法の一環（蜜から灰へのMaba神話と共通する）。続く婚姻譚にもこの主題は受け継がれる。

一方、健気に妻問い努力を繰り返すモンマネキ。



第3話：地虫と同盟。姑は「雑草を刈って」と嫁に命じた。嫁は地に潜って草の根を噛み切った。すぐには倒れない。姑はサボったと勘違いして叱責した。嫁は逃げてしまった。

第4話：金剛インコとの同盟。嫁は一茎の穂で樽一杯のビールを作った。姑はそんな作り方は文化に反すると叱った。嫁は逃げた。飛び立つ時に「カヌーに水を張って木の葉を落とせ=魚の起源」 「そのカヌーで妾を追いかけてみよ=航河川の始まり」



カヌー航行の図、本書挿絵
 舳先に女（月の女神）、艫には男（太陽神）。

人骨の細密画メキシコティカル出土

第5話 M354人の女との同盟

川には魚が溢れている。モンマネキは漁労を知らない。妻に迎えた女は漁獲にたけて毎日いそしみ、成果はかならず大漁。しかし奇怪な漁法だった。

身体が上下分離式で、下半身から抜けた上半身は勝手に水面を動き回る。下半身は岸辺に置いて股間から経血を垂れ流す（本文に経血の記載はないが小筆が類推）。流れに漂う血の臭いにピラニアがおびき出され、水面に浮かぶ。

上半身がそれを手づかみですくい上げる。普通の人がこんな漁法を実行したら、肉食ピラニアに下半身が嚙られてしまう。しかし彼女は上半身が水面に浮くだけで安全、心置きなくピラニアを捕る。両半身の分離特技を生かした魚獲である。

毎日の豊漁、姑は訝しく跡を追う。川端に下半身を見つけ隠してしまった。上半身はモンマネキにしがみつく。ほうほうの体で引きずり落として逃げ帰った。

モンマネキに食料を安定供給するこの漁法、しかし預言者の姑老婆に否定された。食事作法に叶わないから；

- 1 女が魚を捕るとは文化しきたりへの反則である。
- 2 経血とはそれ自体が禁忌、まき餌にするは食事作法の違反（間接で経血を食す）。
- 3 周期性のない（垂れ流し）月経は非文化である。季節を決め（オリオンから髪の毛の毛座）族民共同で漁を実行する。


女の体を張った自然漁法を、文化視点から、否定したのだ。

もしモンマネキに文化伝道の預言者（みたいな）祖母がいなかったら、この世は人獣混淆か上下分割、垂れ流し女のカオス世界になってしまった。

同盟譚5話に見るモンマネキ 失敗の 原因

- 1 不適切食材、不適切取得
- 2 自然への侵襲 (少ない材で多量の加工品)
- 3 周期性への侵犯

食事作法の未発達 (文化発展の途上)



レヴィストロース
神話学第3巻
食事作法の起源 1
了